
萌えっ娘もんすたぁ～ある最強のトレーナーの場合～

紅魔館雑務総括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えっ娘もんすたあゝある最強のトレーナーの場合ゝ

【Nコード】

N7953E

【作者名】

紅魔館雑務総括

【あらすじ】

萌えっこもんすたあ・・・それは人とともに歩み、人々に雑じる存在。それは時として『ともに戦う仲間』、『愛し合う伴侶』、『忠実な従者』となり、人に溶け込んでいた。・・・・この物語は、強さを極めたトレーナーの少年と、それに従う従者、そして少年が引き取るようになったひとりの『萌えもん』の、愛と涙と時々鬱の物語・・・・。

プロローグ『事のあらまし』（前書き）

考えるな・・・！

感じろっ・・・！

あ、ヒトカゲかわいいよヒトカゲ。

プロローグ『事のあらまし』

「……僕ですけど」

着信先を見て不機嫌そうな、十台半ばの少年。
どうやらそれ以外の理由で、悲しそうである。

『ああ、また圏外かと思ったが、大丈夫だったようだな』

漆黒に輝く『ナビゲータ』からは、初老らしき声。

それなりに気を使って陽気に振舞ってはいるが、怒りと苛立ちが見え隠れしている。

どうやら少年以外の理由で、不機嫌なようだ。

「何のようですか。これから銀山シロガネやまに行きたいんですけど。水がおいしいんで」

『レベル100の仲間^{仲間}に囲まれて、さぞや楽しいだろうな』

「特に愛着のない100レベのメイド達じゃ、いても退屈なだけですよ」

『傲慢だな。……そこで、だ。『フレイア』を失った傷の癒えていない君に、新たなパートナーを提供しようと言うのだよ』

「……『フレイア』の代わりなんて……いるわけがない」

『代わりではない。また別の、パートナー。第二と考えるもらってもいい』

「厄介払いに、僕に『萌えもん』を渡そう、ってわけですか？」

『ふ、ばれたか』

「種族は？」

『ヒトカゲだ』

「・・・よりによつて、何で・・・」

『いいだろう?』

「・・・明日、九時に研究所に訪ねさせてもらう」

『把握した。伝えておこう』

「言つとくけど、メイドも連れて行くから」

『嫉妬させるなよ?』

「大丈夫だよ、忠誠心の塊みたいに育ててるから」

『違う。私が、だ・・・そのメイド達に』

「はは、そりゃあ嫉妬してもらわなきゃな」

『じゃあ、用件は伝えたからな』

「じゃあ、また今度」

「・・・マスター」

後ろから話を聞いていた、氷のように透き通った青の少女は、心配げに声をかけた。

「嫌なら、ついてこなくていい。もし引き取ったら、数ヶ月は帰つてこられない。・・・家のメイド達には、帰ってから伝えるよ」

冷たくはないが、想いはあまりこもっていなさそうな声。

「マスターのいるところは、私のいるところでございます。少なくとも私は、御供させて下さい」

「・・・システイナ・・・ありがとう」

少年の声に、少し温かみが現れた。

「いいえ。私は、マスターの忠実な従者。・・・それに、マスター一人では満足な生活を出来そうにないので・・・心配なのです」

「ツたく、もう・・・わかつてるじゃん。じゃあ、水を汲みに行こうかな」

踏み出した少年は、少女の手を引いていた。

「はい、マスター」

頬を少し緩め、青い少女は手を引かれるままに進んだ。

ブログ『事のあらまし』（後書き）

どうも、今回趣向を変えて『萌えもん』やってみました。

あ、感想も残してくれると嬉しいです。

こんどから、少しペースを守って投稿して行きたいと思います。

First Story:『初心に返れ!』(前書き)

これは、まあ、『クリスタル』と『炎赤・葉緑』の類をごちゃ混ぜにしたって考えてもらっていいです。

え?　なんで『炎赤・葉緑』なのかって?

後からわかります。技とか特性とかありえん(笑)
というわけで、ゆっくりしていつてね!!

First Story: 『初心に返れ!』

Place: 素白町マサラタウンオーキドの研究室

この世界には、『萌えっ娘もんすたあ』・・・通称『萌えもん』と呼ばれるものがある。

人の言葉を解し、人とともに歩む、一言で『パートナー』と称するには重すぎる存在となっていた『萌えもん』。

さまざまな動物達を『擬人化』したような姿を持っていて、よほどの特徴でない限り、衣服の着換えが可能らしい。

時には友、時には恋人、時には妻、時には従者、時には主人として、『萌えもん』は人の隣で・・・いや、人々の中で存在し続けている。

そう、彼らもまた

。

「どうも。ノリアキさん」

「オーキド博士と呼べ、ミナト」

「はいはい、オーキド博士」

少年の名は、ミナト・・・漢字にすると『湊』。

フルネームを『風かなぎ湊』と言う。

目の前にいる初老の白衣の男は、『オーキド ノリアキ』・・・漢字で『大城戸 朔明』と書く。

「おお？ その子がお前のメイドか？」

「ちよつと、そんなに視姦しないの。僕のお気に入りだから」

「ま、マスター・・・」

「なつ、ミナト！」

後ろにいる青い姿の少女を、ミナトは手でかばった。

彼女の名は『システイナ』。『萌えもん』の従者・・・種族は『スイクン』、伝説級の『萌えもん』・・・世界にただ一人の『萌えもん』なのだ。

「チャンピオンを倒したにも拘らず、いろいろな場所をふらついてどこにあるかわからん家に住んで、何かを求めて進み続ける・・・全く、何なんだお前は」

「いまさら何を。もう今年で三年目・・・メイドは全員レベル100になつたし」

「なあ、誰だ？」

現れたのは、幼い少女。赤毛に赤い目、オレンジ色の服。

「・・・マスターになんて口を・・・斬る！」

システイナが手に氷を作り、少女に突つかかる。

「システイナ、ストップ！」

「っ！・・・了解」

それをミナトは静止、システイナは従った。

「さて、君がヒトカゲ・・・だね？」

ミナトが歩み寄り、手を差し伸べる。

「触んなボケ！」

パン、と手を少女ははじいた。

「私にはな、『ティア・アトカーシャ』っていう立派な名前があるんだ！」

「・・・それは失礼、ミス・アトカーシャ。・・・オーキド博士、この子がどうかしたのかい？」

「それがね、もう自由奔放・傍若無人・・・私の手には負えないんだ。この子を、引き取ってはくれまいか？」

むう、とミナトは唸り、

「どうかなあ・・・引き取って、後悔するような真似はしたくない

し・・・」

「オーキド！ 私もこいつと組むのは嫌だ！」

「じゃあ、ずっとここにいますか？」

「く・・・卑劣な・・・」

「・・・ミス・アトカーシャ。少し教えて欲しいんだけど、ちよつと来てくれる？」

「なんだ？」

『ティア』と名乗ったヒトカゲの少女は、先ほどとはうって変わってひよいひよい近付いた。

ミナトは耳打ちの体制に入り、

「ねえ、ひよつとして、オーキド博士に酷い事されてない？」

「！！！」

それを聞いた瞬間、ティアは眼を見開いた。

そして一度、瞬きをして元に戻し、

「・・・されて、ない・・・」

と呟いた。

「今は、オーキド博士は聞いてないよ。だから、ほんとの事を言うてもいいから」

とん、と頭に手を置き、ミナトは囁いた。

「・・・」

少し顔色に陰が生まれる。

「ねえ、何か、博士にされたんじゃない？ 彼、変態ロリコンの気があるから・・・」

「お前は」

「・・・？」

「お前は、私を、裏切らないな？」

声が震えている。何か、恐れているような声・・・。

それに何かを感じたミナトは、

「・・・僕と共に来るのなら、君に誓って裏切らない」

精一杯の誠意を込め、ミナトは、ティアの耳元で告げた。

「！！！」

次の瞬間、ティアは腕で、ミナトの首に抱きついていていた。

「頼む・・・私を、ここから出して・・・」

「わかった。・・・システイナ！」

「御意」

ミナトの合図で、システイナがどこかへ霧散した。

「オーキド博士。この子は、僕が引き取らせていただきます」

「そ、そうか・・・ありがとう」

「あと、婦女暴行罪と、萌えもんを性の捌け口として利用した罪で、警察に連絡しておきましょう」

「・・・何のことだ！？」

「わからないわけでもないでしょう。あなたが、この子に良からぬ事をしたのは聞きましたよ」

「なっ・・・誤解だ、ティア、お前には何も・・・」

「嘘つくな！ 私に、やらしい手つきで傷薬を塗っていただろう！それに、それに！！」

ミナトは、それをみて「それ以上は言えない」のだと理解し、抱きかかえて頭を撫でた。

「・・・何だと？ 貴様、主人の私に！！」

「今の主人は、僕だよ」

「く・・・『萌えもんの揉め事は、萌えもんバトルで』・・・結局だが、ルールに従うしかないわけか」

オーキドは一步後退し、そのポケットに入っていた『もんすたあぼーる』を取り出す。

「く・・・そちらは一体、こちらは六体、勝負は見えておるわ！」

「・・・いま、お前何て言った？！」

「勝負は見えておる・・・と言ったのだ！」

「違う！ お前、『萌えもん』を『体』で数えたな？！」

「ふん、所詮は動物と変わらん。そいつは人間でない！」

「『萌えもん』を『体』で数えることは即ち、

『フレイア』への侮辱に等しい！ その愚かな考え、この場で叩き伏してやる！」

「何だと、できるものならやってみろ！ 『エーフィ』！」
繰り出した萌えもんは、白く輝く美しい尾や耳、装いを持つ少女。擬人猫のような見た目である。

「博士！・・・な、何をすればいいんですか・・・私・・・」
オーキドを見たとなんに、びくつと恐れの様子を見せる。

「あのガキを、ぶっ飛ばしてやれ！」

「は、はい、わかりましたあ！」

「つたく、萌えもん同士の決闘にも拘らず、トレーナー狙いとは・・・
ルール違反も甚だしいよ システイナ！」

「了解、マスター！」

その手でオーキドとエーフィを指し、戦闘の皮切り。

「吹雪、オーロラビーム！」

「はあああああ

！」

まずは、その場に吹雪を錯覚する寒気を作り出し、轟々と風を舞わす。

そしてその後、エーフィに向かって凍りつくような極光を放った。

「レベル100、最大威力4294836225（42億9483万6225）・・・ 256進法式萌えもんステータス表示法則に

置いて、二桁目の上限・・・『技威力』65535と『特殊攻撃』

65535の乗算の積が、この技の威力！いかなる防御も、この攻撃の前にはひれ伏すだろうね・・・といっても、そんなのはほとんど

と運任せ。普段のステータスで言うなら二種類の基本技威力の平均

152と普段のシステイナの特攻120の積、18240が普

通。あ、これが直接『耐久力（いわゆるHP）』に換算されるわけ

じゃないんだけど・・・まあ、軽く見積もってもエーフィは倒れる

だろうね・・・そのほかにもいろいろめんどくさい計算はあるけど、
どうでもいいや」
長々と解説を終えて、寒さに少し震えを覚えていると、

「おい、寒いぞ・・・」

すぐ足元で、炎タイプの少女はかちかちと歯を鳴らしていた。

「あ、ごめんごめん・・・ミス・アトカーシャ」

「何だ。早くなんとかしろ」

「・・・抱きしめるくらいしかないんだけど、暖める方法が」

ミナトは、眼をそらして呟いた。

「なっ、ななななななななな？！」

既にミナトの腕から降りているティア、派手に身じろぐ。

「?!」

システイナも動揺した様子。

「そんな、貴様、レディを抱きしめるなどと、そんな、破廉恥な真似・・・！」

「そ、そそ、そうですよマスター！ 仮にも、この子は淑女の一人、そうそう抱きしめるなどという行為に走っては・・・」

「ま、まあ、このまま死なれても・・・」

「!!」

何かに反応したように、ティアが歩み寄ってきた。

そして、足にしがみついた。

「・・・いいぞ」

「？」

「・・・っ抱きしめても・・・その・・・構わない」

「え？ いいの？ その・・・ミス・アトカーシャが」

「うん・・・まあ、その・・・死ぬのは、嫌だからな・・・こんなところで」

（このガキイイイイ！ よくもマスターにそんなことをおおおおお！）

「・・・どうした、早く」

寒さに耐えかねたのか、急かした。

「わ、わかった・・・」

そしてそつと、ティアを抱き上げて、胸元で抱えた。

（心臓があるから、きっと体温はそれなりに高いはず）

「寒いぞ、もつと強く」

「え?!」

「聞こえなかったのか。もつと強く抱きしめろ、と言っているんだ!」

「えええええ……」

「異論は認めない。私が寒くて死んでもいいのか?」

「……むう」

最後に少し呻きを漏らしてから、少し強く抱えてみた。冷たい肌が首元に当たって、やけにひんやりしている。

「うんうん、これで大丈夫」

満足げな声を上げる、ティア。

「……チツ」

ほんの少し、システイナが妬いたのは余談。

「は、博士、私、もう、駄目みたいですう」

パタン、と弱い音を立てて、エーフィは倒れた。

「ったく、使えん猫だ……」

ボールの中にしまいこむと、オーキドは次のボールを出した。

「行くぞ……ハガネール!」

「止めておいたほうがいいと思う」

「な……なぜ止める!!」

「今のシステイナと、お前の萌えもんたちじゃ、実力に差があります。諦めて降参したほうが身の為だよ」

念のため、システイナが氷の刃を作り出して、ミナトを護っている。

「ふ、ふふ、ふふ……」

「どうした、メンヘラにでもなったか」

「ふ、ふはは、っははははははははははははははは! 実に面白かったぞ、ミナト!」

「なっ?!」

「ふは、ははは………はあ」と笑い終えたオ
ーキドは、ミナトの腕に抱かれているティアに、話しかけた。

「……で、どうだった？ ミナトは。かなり、合格ラインいつて
たろう」

「まあ、そうだな……100点満点中、78点と言ったところだ。
合格」

「……え、何のこと？ はなしが りかい できない……。」

「

「はいはい、赤版風に言わなくていいから、教えてやる」

「まず、私が『手に負えぬ』とオーキドが言ったのは本当だ。そし
て……」

システイナが、次の言葉を『予想』として繋いだ。

「恐らく、『私と共に往くに相応しい者を連れてこい』とでも言っ
たんでしょう？」

「ビンゴ。そこで私は、三年ほど通話の繋がらなかったミナトを、
提案したのだ。で、ティアが興味を示した、と言うわけだ」

「さっきお前は、『私に誓って、裏切らぬ』と言ったな？ もしそ
の言葉に、『今も』偽りがなければ、私を連れて、再び旅をしない
か？ 私は、生まれてこの方、『もえもんばとる』と言うのをした
ことがない。それは楽しいというが、私にも教えてはくれないか？」
『今も』とは、そうでなければ連れて行かなくてもいい、と言うこ
とだった。

「……マスター。やはり、我々は……」

「この二人の手の上で踊らされていたみたいだね。……いいよ、
ミス・アトカーシャ。連れてったげる。決闘の楽しさを知らないな
んで、勿体無さ過ぎるからさ」

「……そ、そうか……！」

安堵したように、ティアはミナトに身を預けた。

「あ、そうだ。お前の名を聞いてなかったな」

「僕？ 僕は、何度もオーキド博士が呼んでるけど、ミナト。フル

ネームは・・・『風風 湊』。よろしく、ミス・アトカーシャ」

「・・・てい、ティアでいいぞ・・・／＼」

少し、赤くなっているようだが、ミナトからは今、見えない。

（このガキめ・・・いつちよまえにテレやがって・・・！）

殺気全開のシステイナ。

「ど、どうしたのシステイナ」

「・・・いいえ、何でもありませんマスター」

「そう・・・？　なら、いいけど・・・」

「で、お前に言いたい事が一つある！」

「な、何だいオーキド博士」

「『初心に返れ』！」

「は、はぁ・・・？？」

「もう一度始めからジムやらリーグを行き直して、精神を鍛えてこい！」

「まあ、ミス・・・じゃなかったティアがいるから、その積もりだけど・・・」

「じゃあ、早速行くぞ、ミナト！」

ひよい、とミナトから飛び降り、一番乗りと言わんばかりに走り出す。

「ほら、ついてこい、ミナト！」

「如何致しましょう、マスター」

「そうだねえ・・・とりあえず、パソコン借りるよ」

「ん？　何に使うんだ？」

「vi・・・じゃなくて今の物価レートだよ。最近、傷薬とか買っていないし、全部寝かせたり休ませたりしてたからさ」

「なるほど。回復は全て天然の『美味しい水』というわけか」

「そうそう」

三十分の後・・・

「マスター、そろそろ出かけませんと日暮れに間に合いませんが」
「どうした？ 物の値段でも調べているのか？」

「そうだよ。でもまあもう終わったし、とりあえず最寄の街・・・
ここにはセンターがないから、常葉町トキワシティかな・・・？ 自転車よし、
マップ確認よし・・・行こうか、二人とも！」

「おー！」

赤の少女は拳を空へかざし、少年に肩車している。

「はいっ」

青の少女は一步後ろをついて歩き始めた。

B e N e x t S t o r y .

T
O

F i r s t S t o r y : 『初心に返れ!』 (後書き)

ありがとうございます!

いや、こんな駄文に付き合っただけとはおm(ry

次回、トキワシティ。適当にアイテムを買いそろえて、『鬼畜ve

r』さんの暗いトキワの森 (ライトあり) を行きますので、また

お付き合ってください!

Second story:『いるべき場所の大切さ』(前書き)

ども。

今回は、トキワシティ手前の草むらで戦っちゃいます。

そしていろんなご都合アイテム登場しちゃいます。

では、ゆっくりしていったね!!

Second story:『いるべき場所の大切さ』

Place:常葉町トキワシティトキワの森

マサラタウン

素白町を出発したミナトとティア、システイナは無事、日暮れ前に『萌えもんせんたあ』にたどり着くことができた。

「どうも」

「あら、ミナトさん、久しぶり。元気してた？」

流石にチャンピオンを倒して一人、いろいろほつつき歩いていたら有名にもなる。

トキワシティ常葉町萌えもんせんたあのフロント担当も、その例に漏れず。

「ええ、おかげさまで」

「で、もう日が暮れちゃうし、萌えもん達もそれなりに疲労してるでしょ？」

「まあ、それは仕方ないというか・・・お願いです泊まらせてください」

「お願いされなくても『萌えもんまいすたあ』なら、喜んで泊めちゃうわよ」

「ま、まいすたあ？」

「知らないの？ 貴方、家にいる萌えもん達を、みんなLv100にしちゃったんでしょ？ だから、みんなから『萌えもんまいすたあ』って呼ばれてるのよ」

「そ、そうなんですか・・・」

「意外とすごいんだな、ミナト。見直したぞ」

腰程度の低い位置から、ティアはミナトのジーンズを掴んでいる。

「まさか、マスターがそんな風に呼ばれていたなんて・・・予想も遠く及びませんでした」

後ろで、システイナはミナトの手を繋ぎたそうにしている。

「えっと・・・この廊下をまっすぐ進んで・・・五つ目の部屋以降

が空いてるわ。それじゃ、私はシフトだから」

「あ、どうも」

軽く挨拶し、ミナトは置くの部屋に入って行った。

「駄目だつて！ ティア、いくら久々の旅だからって、はしやがないの！」

「いいだろ別に！ 萌えもんせんたぁに泊まるのは初めてなんだからな！」

「マスターに迷惑をかけられては、私のついてきた意味がない。さあ、おとなしく寝て」

ぴよんぴよんとベッドで撥ねるティア。

それを、ミナトとシステイナが諭す。

しかし、一向に止めないティアにミナトは痺れを切らし、

「はぁ・・・もう、しょうがない。ティア、こつち来て」

ミナトは、自分のほうに呼ぶ。

「ん？ 何だ、ミナト」

少し怪しみながら、ティアは近付いて行った。

と、唐突に

「むぎゅ」

「?????!?!?!」

「はっ?!」

ミナトが、ティアを抱き寄せた。

その直後、ティアは顔を真っ赤にし、システイナはミナトに振り返った体制のまま硬直した。

「は、離せ！ 離せ離せ離せ！ 無礼者がぁ！」

「マスター、どうしたんですか、幼女趣味にでも目覚めましたか？
！」

「いや、そうじゃなくて・・・ティア、『ちゃんと寝る』って約束しないと、離してあげないよ？」

「ひ、卑怯者おお！」

「ほら、さもないと・・・僕に抱っこされたまま寝ることになるけどなあ・・・?」

「ななななななっ?!」

「どうするの? 一人で寝る? それとも、一緒に恥ずかしい思いをしながら寝る?」

「うううううう・・・」

「マスター。ティアが拗ねきらないうちに、離してあげたほうがいいかと・・・」

「そ、そうかな・・・? わかったよ、人の心を感じ取ることに長けた君が言うんだから、仕方ないかな」

ぱつ、と手を離し、ティアの拘束をといた。

「ごめん。ちよつと意地悪しすぎた」

その手でティアの頭を優しく撫で、機嫌をとる。

しかし、その場で固まったままのティアに少し疑問を抱き、少しミナトはティアの顔を覗きこむ事にした。

「ど、どうしたの、ティア?」

「・・・(きゅっ)」

ミナトの手をとり、再びその身に腕を乗せたティア。

その顔は、今まで見たこともないほどの赤面だった。少し、涙が見えているのは気の所為か。

「その・・・っ、えと・・・、い・・・一緒に・・・寝ても・・・ぶつぶつ」

「ん?」

「い、一緒に・・・ああもう、何度も言わせるなっ!」

だん、とティアはミナトを押し倒す。

「なっ?!」

いくらサイズが幼児でも、その腕力は人を遥かに凌駕する。

「どうしても言うなら、お前と一緒に寝てやつてもいいぞ!」

上に乗ったまま、物凄く上から目線で言い放った。

顔こそ涼しそうなスティナは、許可さえもらえたら恐らくティア

を刺し殺していそうだ。

（このガキが・・・ませやがって畜生・・・）

「い、いや、その・・・僕は・・・」

「一緒に寝て欲しいんだろう!？」

ティアのその強烈な目線に押されているミナト。

「え、えつとねえ・・・」

「なあ、そうなんだろうっ?！」

僅かに、頬を伝うそれを見た瞬間、ミナトはいろいろと理解。

「・・・・・・・・ん。一緒でもいいよ」

「はあ・・・」

安堵の溜息を、ティアは静かに漏らす。

一気に気抜けしたのか、ぱたりと倒れたままのミナトに身を預けてしまった。

「マスター、よろしかったので?」

「え? まあ、うん。この子は、多分まだ、母親とわかれた頃とそう変わってないみたい」

「そう、ですか・・・」

「そうでなきゃ、こんな可愛い寝顔は、見られないってすうすうと寝息を立てているティアを、ミナトは撫でた。

（ずっと、何も出来なくて、寂しかったんじゃないかな

？）

次の朝、陽光に目覚めたミナトは、

「ん・・・・・・・・ん?」

伸びをしようとした瞬間、腕にしがみつく小さなモノがいた。

それは、むにやむにやと袖に食いつき、強く掴んで離そうとしない。

「・・・・・・・・」

それが何か理解するのに、数十秒かった。

（あ、ティア、僕のベッドで寝たんだったけ・・・）

「ミナト・・・」

寢言で、自分の名を呼ばれたのが、少し恥ずかしいミナトは、手を離させようと少し動いてみた。

「んん・・・う」

だがそれが仇になり、より強く掴まれることになった。

「か、勘弁して欲しいよ・・・えっと、今の時間は・・・」

黒の『ナビゲータ』をどこから取り出し、時間を確認した。

「えっと・・・八時十七分・・・まあ、もうちよつと寝かせてもいいか」

九時も近くなる頃、ミナトはティアの腕をとんとん、と軽く叩き、起こす。

（強く揺すられて起こされると、その日は気分最悪だからなあ・・・）

「ティア、朝なんだけど」

「んう・・・もうちよつと寝かせろ・・・」

「・・・システイナ、起きてる？」

「はい、マスター。今日のご予定は、如何致しましょう？」

「・・・とりあえず、どれくらいかわかんないけど、できるだけ『トキワの森』に潜ってみるつもり。ティアのレベルも知らなくちゃいけないし」

「『メータ』はまだ完成品ではないのですが・・・」

「大丈夫大丈夫。粗方のレベルがわかればそれでいいし。・・・ティア、起きて起きて。野生の子と『バトル』するよ」

「ええ・・・わかった・・・」

腕を離し、起き上がる。

「・・・！！！」

何かに驚いたのか、ティアはミナトに強烈な足蹴りを食らわせた。

「がはあっ！！」

「ま、マスター、大丈夫ですか?!」

壁に吹っ飛ぶミナト、それに駆けつけるシステイナ。

「お、おまえ、何で私のベッドに・・・」

「いや、それは、ティアと一緒に寝てもいいって言ったから・・・！」

「そつ、そうだったか？」

「そうよ！ 覚えてないからって、マスターを蹴って・・・全く！」
壁に当たったミナトの背中をシステイナはさすっている。

「いつつ・・・じゃあ、荷物を纏めてシヨップにでも行かなくちゃ。

『傷薬』のカートリッジはずいぶん前に切らしたし、『なんでもなおし全治』は・・・よし、九十九回分ある」

「『全治』？ ずいぶんと豪気な治療アイテムだな。それなのに『かいふくのくすり回復薬』はないのか？」

「あれは・・・カートリッジの最大収納数が二十だからちよつと使い勝手が悪いんだよね」

「私もいまだに回復は『美味しい水』です」

「と言うか、さっきから『カートリッジ』って何だ？」

「えっと・・・簡単に言えば、『何度も使えるようにできる充填式の薬剤投与装置』ってところかな？ ほら、ここの穴からこつやつて・・・」

普通の傷薬の投与口を『カートリッジ』と呼ばれた部分の小さな穴にあてる。

そして、普通の傷薬のトリガーを引いた。

ぷしゅう、と音がして、『カートリッジ』の横についているカウンターが一つ増えた。

「これで、『カートリッジ』に一回充填。・・・でもまあ、いちいち普通のを買わなくても、頼んだら普通のより割と安価で充填してくれるよ。ケースついてないから普段より少し安いんだ」

ミナトは、ガラガラといういろいろな『カートリッジ』を取り出した。
『ヨクアタール必中』、『クリティカル麻痺治し』、『クリティカル急中』、『不思議な液（不思議な飴の類）』・・・その他諸々。

「必要なのは・・・『麻痺治し』、『毒消し』、『傷薬』、あと僕
の『美味しい水』。ふふ、こればかりはボトルでないとね」

150ml程度のボトルを、ボトルホルダーに入れて、リュックに
掛けた。

「あー、羨ましいぞ、ミナト！ 私にも天然モノの『美味しい水』
を寄越せ！」

「駄あー目。もうストックがあんまりないんだから」

「むうー！ 寄越せよー！」

「・・・もう、ちよつとただだかんね？」

「わーい！」

両手を挙げて、嬉しそうに笑う。

ミナトはリュックからコップを取り出し、2L程度のボトルから
注ぐ。

「はい・・・あ、システイナ、いる？」

「いいえ、私は自分のがありますので」

と言い、システイナは自らの青いボトルホルダー（保冷専用）を、
ウエストポーチに引つ掛けた。

「ああー！ 私もボトルホルダー欲しいー！・・・んく、んく」

「駄目、ボトルホルダーは『虹宝虫』^{タマムシ}か『貴金』^{コガネ}のデパートしかな
いんだから」

「ちっ、それじゃあ仕方ないな」

コップを返し、ティアは少し残念そうに呟いた。

「えっと・・・とりあえず、シヨップに行こうか」

場所はかわって、常葉町^{トキワシティ}フレンドリイシヨップ。

「ども。あの・・・『毒消し』と『傷薬』と『麻痺治し』の充填、
お願いします」

そう言つて、トリガーから『カートリッジ』を抜いて、店員に手渡
した。

「あ、はい。少々お待ちください」

そして一分程度の後、裏から店員が『カートリッジ』を持ってきた。

「『まいすたあ』さん、支払いは・・・」

「『萌えもんリーグ所属者預金』の『風凧 湊』に。今日はあまり、手持ちがないんで」

「畏まりました。・・・ありがとうございました、またのお越しをお待ちしております」

「それじゃあ、ちょっとレベルを見に『二番道路』でも行こうか」
「おー！」

「とりあえず・・・ねえティア、君は『火の粉』使える？」

「い、いいや・・・」

「そう。だったら・・・システイナ、やって！」

「御意」

システイナは、氷の刃を作り出し、草叢くさむすへとおもむろに歩き出す。

それをなにやら怪しんだか、ティアがミナトに、

「なあ、ひょっとして、草叢を減らすつもりじゃ・・・」

「そうだけど。どうかしたの？」

「お前は・・・」

そこまで言つて、一度言葉を切り、深呼吸。

「お前は、恥を知らないのか!!」

「っ!?! な、何で？」

怒っている様子のティア。その原因がわからず、ミナトは戸惑っている。

「萌えもんにとって、草叢は家も同然・・・いや、家そのものだ！

それを貴様、切り払ってしまおうなどと・・・この馬鹿が！」

「えっ? あ・・・」

少し、気付いてきたようだ。

ティアの言動の、真意に。

「お前は、自分の家を焼かれても、悲しくないか?! 辛くないか?! お前のやってるのは、それと同じことなんだぞ!!」

そう。

守ってくれた親もなく。

居場所だった家もなく。

ただ、道路を、洞窟を、逃げ惑っていた彼女は、知っている。

いるべき場所の、大切さを。

自分の居場所の、尊さを。

だから、彼女は赤の他人の為に、ここまで怒る事ができるのだ。

自分と重ねてしまうから。

どうしようもなく、重なってしまうから。

そんな風に思える彼女の心に、その輝きに、ミナトは何かを見出して、ついてこさせたのだと。

「……そう、だよね……僕、何か勘違いしてた。野生の萌えもんは、ただ狩られるだけの標的に過ぎない、って……そんな風に思ってた……違うんだよね。萌えもんだって、僕らと同じ、意思を、心を持つてる、生き物なんだもんね……」

「わかったか?! あいつらも、ただ遊びで戦ってる奴らだけじゃない、もっと重い理由で戦ってるかもしれない……だから、そんなこともう二度とするなよ!？」

「……うん、わかった。そんな風に言われたら、こんなことできなくなっちゃった。……さ、システイナ。取り合えず、入ってみようよ」

背の高い草を掻き分け、入っていく。

ティアは、見失わないように背中に負ぶっている。

「えっと……誰かいないかなあ……」

「隙ありイイイ!」

「っ?!」

ミナトに、野生の『キャタピー』が襲い掛かってきた。

緑の髪、虫を模した服。確実に『むし／くさ』タイプの萌えもん。

「おっと、危ない危ない……っティア!『引っ掻く』!」

「了解、ミナト・・・つらあ！」

萌えものの『引っ掻く』・・・発動中に限り、爪を鋭く、堅くして思い切り相手の身体を引っ掻く技で、その威力は普通の人がミニカッターを持った程度の戦闘力を持つ。

「ぐう・・・！　そう来るのなら・・・っ

！」

「つく・・・力が・・・はいらない・・・」

人には聞こえない音域の『鳴き声』・・・それは萌えものの耳に届くと、筋肉の収縮信号の伝達が弱くなる作用を持ち、突発的な運動である『攻撃』の効果を下げる能力を持つ。

と同時に、急激な攻撃をかわすことが困難になる、という二次効果も持つ。

「ふふ、かわせまい・・・はあ！」

キヤタピーが、肩から思い切りタックルをかましてくる。

俗に言う『体当たり』と言う奴だ。

「く・・・」

モロに喰らって、草叢を無様に転がるティア。

「だ、大丈夫？！」

「ああ・・・なんとか、な。だが、それなりにキツイ・・・力が入らんのだからな」

「く・・・『鳴き声』対策はしてなかったな・・・」

「マスター、『イヤーカーバー』は渡してないんですか？」

「渡してたらこんなことにはなっていないって・・・あ、あれ？」

『メータ』をみていたミナトは、何かに驚いた。

「どうなさったんですか？」

「ほら、見て。この、攻撃力の数値・・・」

「跳ね上がってますね・・・攻撃させたら、どうなるんでしょうか」

「よし・・・ティア、もっかい『引っ掻く』出来る？！」

「ふん・・・出来んわけが、ないだろう・・・！」

「そんな身体で、どうやって『引っ掻く』つもり？！」

「……『素早さ』の数値は、通常のヒトカゲどころか、『リザード』すら上回っている……それを利用して……ティア、後ろに回りこんで!」

「了解、任せとけミナト!」

たん、と草叢の陰に消え、キヤタピーの前から姿を消す。

「どこに消えた?!」

背後から、思い切りの『引つ掻く』。

渾身を込めたその一撃は、キヤタピーの急所を捉えた。

「つか、は……!」

「思い知ったか、馬鹿め……!」
俯^{うつむ}けに倒れたキヤタピー。

目を回して、気絶している。

「で、ミナト。私は、どれくらい強いんだ?!」

「その前に、この子をなんとかしないと……そだ、『木の実』が確か……」

ミナトは、キヤタピーに『木の実』を食べさせる。

「んんっ……はっ! お、お前、どうして……」

「いや、だって、倒れてる萌えもんを助けるのは、人の性だし」

「でも、お前が倒したんでしょ?!」

「いや別に……ごめんごめん、僕が倒した。まあ、ほら、倒れたままにするのも、なんか嫌じゃない? だからさ、まあ、理由なんて聞かないで」

「……覚えてろよ! 絶対に仕返してやるからな」

そう言っ^てキヤタピーは、どこかに消えていった……。

「で、どうなんだ!」

「んとな……Lv6……さっきのでレベルアップしたみたいだね」

「実感はないがな」

「そう言うものなんだよ、レベルつてのは……えっと、一番メジャーな図り方で言うと、……HP42、『鳴き声』PP20、『

引つ掻く』 P P 18、『攻撃』14・・・あれ、さつきまで25だったのに。まあ、いいか。『防御』12、『素早さ』36・・・ぶっ飛んだ数字だね。『特殊攻撃』12、『特殊防御』17・・・つてところかな。標準よりちよつと高いくらいだね」

「そうなのか？ まあ、Lv5じゃ仕方ないか・・・」

自分の腕をさすりつつ、ティアは呟いた。

「えっとね、あと萌えもんには種族によつて『特性』つてのがあつて、何らかの効果が戦闘中に現れるんだ。えっと、ティアの『特性』は・・・『撃たれ火』？ えっと、ノーマルタイプと炎タイプの攻撃を受けると、攻撃力が爆発的に上昇・・・原因はこれが」

「ほう・・・すごいな、その『撃たれ火』と言う奴は」

「聞いたことない特性ですね・・・」

と、そのとき。

「そう言えば、昨日から、何も、食べて、なかつた

」

ティアが、倒れた。

「てい、ティア？！ ああ、そうだった！ 昨日は昼食だけで夕食を食べてなかつた！ と、とりあえずどこか食堂・・・つて『虹宝虫市』とか『浅葱市』^{アサギシティ}くらいしかなかったし・・・どーしよ？！」

「マスター落ち着いて！ とりあえず今は『萌えもん携帯食糧』を・

・・・」

「そ、そつか。えっと・・・携帯食糧の『キャリングボール』は・

・・・」

と言い、『萌えもん携帯食糧』とテープの張られた白いボールを取り出し、縁にあるロックを解除。

そこから、青白い閃光が奔り、茶色い段ボール箱が現れた。

「えっと、幼生萌えもんの携帯食糧は・・・」

「これでは？」

システイナが箱から袋を一つ取り出し、ミナトに手渡した。

「あ、それぞれ・・・とりあえず、ティアが起きてから、食べさ

せるようにしようか」

「そうですね」

「とりあえず街に戻らないと・・・」

B
e
N
e
x
t
S
t
o
r
y
..

<
<
T
O

S e c o n d s t o r y : 『 いるべき場所の大切さ 』（後書き）

ここまで読んでくれた貴方に感謝。
で、感想も残してくれると。

それでは皆さん、次のお話までさようなら。

Third Story:『影の森・前篇』（前書き）

すみません、ペースを守れてない上にちよつと短くなりました。
今回は二部編成にします。

後篇は、もうちよつと長くしたいなあ・・・と思います。
それでは、ゆっくりしていつてね！！

Third Story: 『影の森・前篇』

Place: 『トキワの森』

「うつわあゝ、何でこんな暗いわけ・・・？」

「最近、隣の道路の段差がなくなり、両道開通したおかげで、この森はほとんど管理者がいなくなり、かなり閑散としているようです。ほら、後ろの窓を見てください」

「んん？　なんだ？」

一同が振り返ると・・・そこには。

「わ、気持ちわるう！」

「・・・なんだあれ？」

「完全野生化したむし萌えもん・くさ萌えもんです。今やあれば、ただの動物や虫と同じ程度の感情しか・・・」

大量の緑の何かが群がっていた。

システイナが言うには、人に触れていなかった萌えもんは、理性や言葉、拳句には人に対する手加減もなくなるそうだ。

「えつと・・・もうちよつと進んでから、話を始めようか？」

「そ・・・そうですね、『フラッシュ』を覚えた萌えもんは今のところいませんから」

「そうなのか？　じゃあ、行こうか」

ティアは、オーキドの研究室にいた頃から、本をよく読み、それなりの知識は備えているらしい。

それは、その辺の『虫捕り小僧』や『ミニスカート』を凌駕する程度、だそうだ。

そして・・・突然、
ドンッ！

何かにティアがぶつかった。

「あ……」

「だっ……だ……め……力が……」

「く……『鳴き声』を集団で……！ 萌えもんバトルじゃないよ、こんなの！」

ざっ、と草を掻き分ける音がミナトの耳に入り、斜め横に光をあてる。

「コラッタ！」

鼠に似た耳を頭に乗せ、紫の装いを持つ小さな萌えもん『コラッタ』が、ミナトに襲い掛かる。

「ちいつ！」

飛びかかるコラッタを、ミナトは足蹴りで横に。

「ちよつと見劣りするけど……！」

リュックから、二つのイヤホンに似た何かを取り出し、それに何かデバイスのようなものをつけて、システイナとティアに渡した。

「耳につけて！ ノイズキャンセラーと『鳴き声』の異常をある程度治すようにしてあるから！」

「わ……わかつ……」

なんとか二人はそれを耳につけると、流れてくる音楽に驚愕。

「も……萌えもんの笛……！」

「なんだか……気分がよくなつて来た！ 何だこれは？」

「『ラジオ・萌えもんの笛』。カントーでしか流れてないんだけど、昔使ってた『萌えもんギア』が役に立つとは……立って！ 次が来る前に逃げるよ！」

「わ、わかりましたマスター！」

ライトを消すと、互いがどこにいるかわからなくなるこの暗がり、三人は走っていた。

しかし照らしたところからどんどん野生の萌えもんは増加するばかり。

出口を見つけたはいいが、そこにも野生の萌えもんはいた。

そして鼠算方式が増えていく萌えもん達。

「く・・・ティア、肩車！」

「わ、わかった！」

「システイナ、手を！」

「は、はいっ！」

ティアが、ミナトの頭に飛び乗り、システイナは手を繋ぐ。

「しっかり、掴まって・・・懐中電灯、消すよ！」

カチリ。

ボタンが押され、光が消える。

「ま、マスター！」

「手を離さないですよ?! 一気に走りぬけるから！」

「了解しました！」

それからどの位走ったろう。

しばらく追撃を逃れ、いい感じに四本の本が正方形の形をとっている場所についた。

そこでミナトは、ようやく薄暗いライトをつけることができた。

「はぁ・・・はぁ・・・ここまで、来れば・・・」

「だ、大丈夫・・・だと・・・」

「なあ、ミナト・・・『蚊帳』の、類とか・・・あるか・・・?」

「か、蚊帳・・・? あぁ・・・あれ、か・・・」

白いボールに『吸入』と書いてある。

ロックを解除し、青白い閃光が走る。

そこから、なにやら白い機械と、管のようなものが現れた。

俗に言う『吸入機』と言う奴だ。

「その前に、とりあえず、呼吸を安定させないと・・・ほら、ティ

アからこれつけて、深呼吸」

「あ、ああ・・・」

なんとか走り続けた後の呼吸を正常に復帰させた三人は、蚊帳・

・のように見えるがただの蚊帳ではないアイテム『虫除けの壁』を四角く区切られた木にぶら下げ、その中に野宿用に用意しておいたテントを張った。もちろん、その周りにもゴールドスプレーをさらに濃度を濃くし、一日二日は大丈夫と豪語されていた『プラチナスプレー』を二、三分使用した。

「多分、これで明かりがあっても近寄れはしないと思うけど・・・で、これからの予定だけど」

「こんなに暗いんじゃない、何も出来やしませんね」

「そうだな・・・」

「いやいや、それがそうでもない。システイナ、暗がり置いて、自らの頼れる感覚は、何？」

「・・・やはり、戦闘となると、気配を感じ取る第六感シックスセンスの類・・・ですか？」

「そう。萌えもんは人と比べると、段違いに戦闘センスに長けている。だから、そう言う気配を感じる能力は、萌えもんバトルの必須事項の一つなんだ。で、この暗闇なら、それを育てることも可能かな・・・ってわけ。どう思う、ティア？」

「・・・私に振るか、そこ？」

「ごめんごめん。修行する側だからさ、ちょっと話を聞いておこうかと」

「なるほどな。そうだな・・・確かに、いいんじゃないか？ただ、道に迷うといけないから、何かポジショニングシステムのものがあるといい気がするぞ」

「そうだね・・・あ、『ナビゲータ』に対応した発信機、確か持ってたかった？」

「ああ、『秘密基地』用発信機ですね？ ありましたありました」
そういつて、システイナはバッグから黒いテレビのようなものを取り出した。

「えっと・・・モニターのバッテリーは大丈夫みたいですけど、衛星とのリンクが切れてます。だから、なるべく遠くには行かないで

「くださいね」

「わかった。えっと、今の時間は・・・まだ大丈夫みたいだね。よし、ティア、出かけようか」

「うん！」

そしてミナトとティアは、百メートル程度歩いたところで、唐突に野生の『ビードル』が現れた。

薄暗い、萌えもんには見えない程度の赤を持ったライトをつけていたので、辛うじて確認できた。

「

！！」

「出会い頭にそれはないでしょ?!」

「ちっ、この程度っ！」

草叢にティアが突っ込み、正面で思い切りドロップキックをかます。

「どら　　！」

「てい、ティア、そんなことができたの!？」

「当たり前だっ！」

追加攻撃、引っ掻いた。

がさがさと音がしているが、草叢の中なのでよく見えない。

「ぐっ！」

「きしゃあああ！」

「くそ、このっ！」

次にティアが出てきたとき、傷だらけだった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ティア、大丈夫?!」

「ふふ、これだけ傷ついたら・・・ミナト、回復だ！」

「わかった！」

腕をとり、そこからジェット注射式の『傷薬』のトリガーを引く。

「そう言えば、お前の傷薬は塗るタイプじゃないんだな」

「軟膏系列の? そんなの、二年前に生産中止。今主流なのは、このジェット注射式か、液体塗り薬（ウナなんとかの類）だって・・・

・オーキド博士、よほどの変態だったんだなあ・・・？」

「そ、そうなのか？ やっぱり」

と言っている、向こうから再び仕掛けて来た。

「はあっ！」

「思いっきり引っ掻いてやれー！」

ビードルは飛びかかってきた勢いのまま、体当たり。

対するティアは、爪を硬化させて、引っ掻くの体制で飛び出す。

すれ違いざまに放たれた一撃は、恐らくビードルの急所を捉えた。

しかし、いささかレベルが違いすぎる。この程度で倒れたりはいない・・・と言っても、体力面で既にビードルはギリギリ立っている状態。あと一撃でも喰らえば恐らく、倒れるだろう。

「よし、トドメだあ」

「！」

地面を蹴り、正面に跳躍して『引っ掻く』。

「ぴしゅ」

「」

と、突然何かビードルの手から現れた。

それは全ての光を反射し、神々しいまでに輝く

白。

「『糸を吐く』?!」

「ちっ、この！」

爪で引き裂こうと必死で糸に触れるも、それが逆に絡みついて、手が覆われる。

「くそ、離れる！」

勢いよく腕を振るった所為で、勢いを自分で消してしまい、ころころと横転。

「く・・・！」

立ち上がるうとしたが、地面とくっついてしまって、離れない。そしてそれを見ると、ビードルは去って行ってしまった。

「く・・・！」

「仕方ない、と言えば仕方ないのかな・・・？」

「それより、動けん！ 何とかしろ、ミナト！」

「えっと・・・虫萌えもんの糸は、二、三分で硬化して簡単に崩れるようになるから・・・」

「その前に何とかしろ！」

「まあ、『火の粉』を覚えないことには・・・」

「ちっ・・・」

その周りには、暗闇だけがいるわけではない。

とりあえず十分程度は持つだろうということで、『虫除けスプレー』を自分の身体に振ったミナト。

ティアは、まだぐしゃぐしゃと糸を掻き回し、硬化を遅らせていた。

そう、大量の虫萌えもんが、その周りにはいるのだ。

<<T o B e N e x t S t o r y :

Third Story:『影の森・前篇』（後書き）

ここまで読んでいただいて、どもありがとうございます。

カントーはおそらく、クチバシティで終わるかと・・・。

そこから、ジョウト・アサギシティ辺りにいって、そこから・・・
考えてません。

それでは、またいつか。

F o r t h S t o r y : 『 陰の森・後篇 』 (前書き)

トキワの森が野生化しちゃって、主が出てきます。

レベル差？ 気にしない気にしない。

火の粉最強伝説（笑）

それでは、ゆっくりしていつてね！！

Forth Story: 『陰の森・後篇』

Place: トキワの森

《ミナト・ティア側 トキワの森の奥》

「すう

はあ

」

トキワの森で、どれほど訓練をしただろう。
レベルはいまだに上昇しないが、瞬発力、機動力、それに気配を読む能力は、飛躍的な上達を見せている。

「すう

はあ

見えた!」

深呼吸をして、目を瞑るティア。

「どうしたの?」

「左から二人、前から一人、右から・・・二人。戦闘体制で近付いている。郭翼陣形にしては、やけに正面突破しやすいな・・・」

「そ、そこまでわかるようになるの?」

「ん? ああ、だんだん、気配が読めるようになってきた。・・・

正面はピカチュウ・・・左はコクーン、右はビードル・・・と言ったところか?」

指を指して、萌えもんの種類までいいあてる。

「なるほど。両翼が先に近付いて攻撃を仕掛けたところに、正面は決めに入る・・・と言うことか。いいだろう、ミナト! 正面へ突っ込むぞ!」

「っ、わかった!」

ティアが、ただ速いだけならまだ野生の萌えもんにも勝ち目はあっただろう。

だが『撃たれ火』にその見事なフットワークが、絶対的な武器となる。

「はあっ!」

横へ跳躍、少ししゃがんで足払い。

こけさせたところで、引っ掻いて一歩退く。

連続で引っ掻いていると、爪の硬化物質の分泌が追いつかなくなり、PP（限度回数）を超えてしまう可能性がある。

「そろそろ・・・よし、来た！」

「ぷしゅ」

ビードルの『糸を吐く』。

これを、容易くかわし、隙のできたビードルに引っ掻いて、その乗っていた木の上から叩き落とす。

「っらあ！」

もう一人のビードルは、胸倉を掴んで木に叩きつけてから落とす。

「っと。よっし、こい！」

「

ピカチュウが『鳴き声』を放つ。

「ふ、この程度か？ 効くわけないだろ、愚か者め」

迫るティアに、ピカチュウは頬から手に移した電気で、応戦しようとする。

「気をつけて！ 『電気ショック』が・・・！」

「私が、何度ピカチュウを倒したと思う？」

手から指向性を持って放たれた電撃は、確かにティアを穿つ。

「く・・・何度やられても、この技は痛いな・・・」

電撃の当たった部分をパンパンと払い、後退。

「だが・・・その分だけ、こちらが有利になる！」

くるりと回転、草の陰へ。

なにやら草叢が揺れてから、二つの飴色の何かが飛び出た。

「当たれ」

飴色の何かの正体は、コクーン。

二人でどうやら、ひたすら『堅くなる』をしていたようだ。

そしてそのコクーンが、ビードルの頭に命中、両翼の四人は、倒れた。

草叢から勢いよく飛び出たティア。そして、華麗に着地。

振り向きざま、ピカチュウの『体当たり』に当たった。

勢いで間合いが広がり、ティアが少々不利な状況に置かれる。

「く……突っ込む！」

連続で来る『電気ショック』に目もくれず、ティアは思い切りピカチュウに飛びかかった。

「全力で……『引っ掻く』！」

渾身の力を込めたアッパーの『引っ掻く』は、確かにピカチュウを吹き飛ばした。

「っはあ……はあ……どっ、どうだ……思い知ったか……！」

目の前で気絶しているピカチュウ。

そして、ティアは肩で息をしている。相当、先程のダメージが大きいのだろう。

「お疲れ。どうやら、Lv7になったみたいだよ。えっと……まあ、特に基本ステータスに大した上昇は見られないみたい」

「どうでもいいから……早く、治療してくれ……」

「う、うん」

普通はボールホルダーになっているはずのベルト。

そこは、もはやドラッグホルダーとなっている。『傷薬』や『毒消し』、『麻痺治し』等々、様々な薬剤が入っている。

そこから一つ、『傷薬』を取り出し、ティアの腕にあててトリガーを引いた。

「ふう……もう少し休ませろ」

「ん」

「そう言えば、僕ってティアに『ありがとっ』って言われたこと、ないよね……」

頭の中で呟いているつもりが、ふと、口に出たようだ。

「……トレーナーが萌えもんを助けるのは、当然だろうっ？」

「……声に出てた？」

「ああ。癖なんじゃないか？……まあ、お前が私と対等な立場

で話せるようになれば、礼を言つてやらんこともない・・・が。無理だろうな、所詮ミナトだ。それは無理だろうな」

「なっ、そんなことないって・・・！ 第一、立場的に言えば・・・僕が上なんじゃないの？！」

「・・・どうだか。そういうところが、『所詮ミナト』なんだ。私の言っていることの真意がわからないのなら、わかるまで放置だ」

「っ・・・わ、わかりません教えてくださいお願いします」

土下座してミナトはティアに真意を問う。

「謙^{へりくだ}つて、というわけでもない。まあ、解らんだろうな、お前には」しかし、それをティアは軽くあしらう。

「まだ、解らなくともいい。それを知る日が、必ず訪れる」

あくまで教える気はないらしい。だが、それは解るものだという。それを解せないミナト。なにやら腑に落ちないらしいが、それを飲み込むしかない^と割り切ったようだ。

「・・・解るんだったら、いいさ」

「ふ・・・来たぞ、左！ トランセルが四人、『堅くなる』」

が持続した状態で突っ込んできた！」

「よし・・・行こう、ティア！」

「応！」

（こんなところだけ・・・無意識なのか？ それとも・・・前の恋人の癖なのか・・・何にしても、こいつなら私の真意、理解することができそうだ・・・。選んで正解・・・か！）

飛び出すのは、二人同時。

どちらともなく歩み始め、その地を蹴つて。

その姿は、三年前の『フレイア』との姿を思い出させるものだったのは、当の本人達すらわかることはなかった。

《システイナ側 トキワの森・ミナト達のキャンプ》

『虫除けの壁』・・・萌えもん達が近寄れないように、スプレーの成分を繊維に染み込ませた蚊帳の中に、氷神『スイクン』であるシ

ステイナはいた。

「……寄らば、斬る……。おとなしくそこでじっとしていなさい」

殺気を放ち、周りににじり寄る虫萌えもん達を威嚇する。

（この数なら、充分『吹雪』と『オーロラビーム』で充分なんだが……まあ、余計な体力は使わないに越したことはないし……）

ステイナも、どうやら多少気配が読めるらしい。

「えと、マスターは今どの辺に……」

ディスプレイを見たステイナは、驚愕した。

「っ、どういうこと?!」

反応がない。半径300メートル以上の外へ、出て行ったというのか。

（そんな馬鹿な……。ここは広くて40万平方メートル……。考えられる理由は、恐らく……。ここが、森の中心地である……。つてこと……。?! だとしたら、森の主が……。縄張り荒らしであるマスターに報復をしかけてくる可能性がある!）

『萌えもんギア』を取り出し、連絡をとる。

「マスター!」

『ステイナ? どうかしたの、そんなに慌てて……。?』

《ミナト・ティア側 トキワの森の奥》

「ステイナ? どうかしたの、そんなに慌てて……。?」

「どうかしたのか? ステイナに何か……。?」

「それが、ずいぶん慌てた様子で……」

『マスター! このキャンプは、どうやらこの森の中心……。主の住処だったと思われます! 恐らく、報復に訪れる可能性があります! すぐにお戻りを!!』

「な、なんだって?! ち、しくった……。ティア、すぐに戻ろう!」

「どうしたんだ?」

「この森の主……リーダーの萌えもんが、僕らに住処をとられた腹いせに、仕返しに来るかもしれないんだ！ おそらく、この野生同然の森に、主がいてもおかしくはない……！」

「今の私じゃ、到底太刀打ちできない……ってことだろう？」

「そう。ほら、掴まって！」

「私のスピードを甘く見るなよ？」

「じゃなくて、僕が追いつけないって！」

「……仕方ないな。ほら、後ろ向け。肩車する」

ミナトは後ろを向き、少ししゃがむ。

そして、ティアが軽く跳躍してミナトの首に掴まる。

「ほら行け！ 主が現れる前に少しでもシステイナのところに帰るぞ！」

「はいはい、しっかり……僕の頭がつぶれない程度に掴まっててよ！」

「おう！」

全速疾走、自分の来た方向を一直線にミナトは戻った。

（間に合え、間に合え、間に合え……システイナが、一番危ない……！）

襲い来る萌えもん達にも目をくれず、ミナトは走った。

システイナは、監視で疲労した精神を、取り敢えず気合を入れなおすことで補填。主の来訪を構えた。

「っはぁ……はぁ……システイナ、大丈夫？！」

ミナトとティア、キャンプへ到着。

ティアはミナトの肩から降り、ミナトは膝をついて肩で息をしている。

「ま、マスター！ マスターこそ大丈夫なんですか？！」

「はぁ、はぁ……っ僕は大丈夫……主は、まだ、現れてない？！」

「え、あ、はい。まだ、来ていませんが……」

「よかった・・・」

安堵からか、突然ミナトは倒れてしまった。

「あ・・・マスター?!」

「安心しろ、こいつ寝てるだけだ。大したことはない」

「そう・・・。じゃあ、テントに運び込もうか」

「そうだな。ただ・・・私は身長が足りないんだが」

ティアは、自分を指差して言う。

「・・・私が逆お姫様抱っこで運ぶ必要があるのね・・・」

そしてミナトを抱えて、少し『しゅん』としてススティナはテントに入ってしまった。

次にミナトが起きたとき、事態は・・・あまり変わっていないかった。依然警戒状態にあるススティナとティア。

一ミリ一ミリ距離を縮めてきた野生の萌えもん達。

「・・・鬱陶しいな・・・そろそろボールを換えるべきかな」といって、各『虫除けの壁』の四隅にいた球体を青いものから黒いものへ取り替えた。

「マスター、何か違うのですか？」

「ん。えつとね・・・ほら、見てよ。野生の萌えもん、退いて行くでしょ？　これが、網から霧散してた成分の発生源なんだ。これを換えると、効果が持続するんだ」

ミナトの言う通り、かさかさと退いて行く野生の萌えもん達。

その中で一人、取り残されて苦しそうにもがく者が。

「あ・・・ちよつと行って来る。あのこ、助けてこなきゃ」

「・・・マスターらしいですね、現在敵である『トキワの森』の野生を助けるなんて」

（つ・・・何故ここまでしていて、私と対等な立場でいてくれないんだ？　やっぱり、こいつもどこかの賢治（『銀河鉄道の夜』的な意味で）のように、上から目線で・・・奴らを助けているだけなのか・・・？）

蚊帳から出て、息も絶え絶え、喉を押さえて苦しそうにもがいているトランセルを、ミナトは抱き上げて効果範囲外へ連れて行った。
「無抵抗の君たちに手を出す気はないんだけど・・・今は、この子に興味はない。取り敢えず、返す」

そう言つて、ミナトはトランセルを地面に置いて戻つて行った。

「よし、行こうか」

「え？」

「マスター、危険です。敵の縄張りに無謀にも近付こうなど・・・今は、ここでじつとしているのが得策かと思いますが」

「この森へ入った目的は、『ティアの訓練』だから。少なくとも、『火の粉』は使えないと『タケシ』には勝てない・・・その先、『御月見岳』^{オシキミヤマ}だつてキツイ。当然の如し『カスミ』にだつて、勝てるわけがない。ここで、少しは鍛えておかないと・・・主が、倒せるくらいは」

少々飛んだ発言をしたミナトに、システイナは反論した。

「マスター！ 今のティアのレベルは、10にも満たないんですよ？ そんなので、ここの主が倒せるわけ・・・」

「ティアの今の運動能力、反射能力、気配察知・・・それと、僕とティアの連携策があれば、きっと大丈夫だよ。ね、ティア」

しかし、それもあつけなく言いくるめられてしまった。

そしてティアが、少し嬉しそうなのは気にしない気にしない。

「え、えつと・・・そうか？ まあ、お前がそう言ふんなら、そうかもしれないが・・・／＼」

「というわけで、行つて来るよ。・・・留守、任せだよ、システイナ」

「・・・しょうがないですね。行つてらっしゃいませ、マスター。この陣の護り、お任せください」

「じゃあな、システイナ！ お前も気をつけてな！」

と言つて、二人で外へ出かけて行った。

「まったく、あの二人は・・・仕方ないんだから。・・・さつきと

同じよ。寄ったら、凍ることになるから」

《ティア・ミナト側 トキワの森・キャンプ近辺》

ティアとミナトが外に出てからと言うもの、攻撃は激しくなるばかり。

傷薬を一度戦闘が終わるたびににつけないといけなくなり、非常に危険な状態。

「はぁ・・・はぁ・・・どう、だ？ 攻撃力は、上がったか・・・？」

「・・・40。レベル20台の萌えもんのステータスだよ。ほんとバケモノ並だね」

「ふ・・・この森の主に勝つために、レベルを上げないといけないだろう？」

振り向いて、ティアは笑ってみせる。

「もうレベルは9・・・そろそろ、兆候が見えてくるはずだよ」

「ん・・・？ 兆、候？ 一体・・・」

と、ティアが言いかけたときに、その兆候は起きた。

突然、ティアが両腕を押さえ、しゃがみ込んだのだ。

「くうう・・・っ、たぁぁぁ・・・」

「てい、ティア？！ 大丈夫？！」

少々、うろたえたミナト。

「いたぁ・・・っ、ぁぁっ！」

「なっ？！」

それは、発現であり、開花。

痛みを忘れ、熱さもなく、それは訪れた。

「はぁぁぁっ！」

腕にあった、紅蓮の炎は手に収束。

目の前には、ノーマルタイプの萌えもん・ニドラン（ ）。

こちらを睨み、戦闘は既に始まっているといわんばかりに構えている。

「行くぞ・・・私の、本領・・・炎を!!」

につと笑い、両手・・・いや、それに萃^あまった炎を、ニドラン（）に向ける。

「つてえええええい!!」

放たれたその炎は、草をピンポイントで焦がし、突き抜け、交わす暇もなくニドラン（）を穿った。

「『火の粉』・・・習得! どうだ、ミナト! 驚いたか!」

「威力もスピードもデフォルトとはまるで段違い・・・やっぱ君は、すごいよ」

「ふふ、もつと崇めろ!」

威張るティア。まんざら気分は悪くなさそうだ。

「・・・ニドラン（）、まだ戦れるみたいだよ?」

しかし、まだ彼は立ち上がってきた。

「チツ・・・何か策はないか?」

「ふう・・・。片手で『火の粉』出せる?」

「ああ。コツは覚えた」

だったら・・・と指を立てて、ミナトは説明を始める。

「放たずに、手に纏った状態で思い切り殴ってみなよ。『引つ搔く』

の反動慣れしてるから、腕力はかなり強いと思うよ」

「ほう・・・。よし、やってみるかちはあるな」

ティアは向き直り、ニドラン（）を睨む。

ニドラン（）も同じ。しかし、多少離れている所為か、ニドラン（）のほうに殺気が乗っている。

「はああああ・・・」

どこからか現れた紅蓮の炎を、ティアは手に纏わせ、普段『引つ搔く』に使う構えに入った。

「キシヤアアアア!」

言葉を知らぬ野生のニドラン（）。頭頂部の棘を、ティアに向

けて突進してきた。

「ティア、『乱れ突き』が来る！」

「くそっ、正面衝突はいやだぞ?!」

「直前で回転してかわして！」

「タイミングがシビアなんだがな・・・っ、と?!」

見事な回転回避。

背後に周り、思い切り手を広げ、零距离で『火の粉』を放った。
両手に、連続で。

「っこのおおお!!」

そして、ニドラン（ ）は気絶、ティアは勝利を収めた。

「ミナト・・・腕に纏わせるだけでは、どうやら効果を発しないらしい。放つ意思を持ってこそ、これは『火の粉』として発現するみたいだぞ」

「へえ・・・気付かなかった。まだ、僕も知識不足だなあ・・・」

「それより、PPを回復してくれ。『火の粉』の限度数が尽きそうだ。それに、『引つ掻く』はだいぶ前からキツイ状態なんだ」

「もう気絶してる相手に、十発近く無駄球撃つからだよ・・・」

ベルトから、『ピーピーマックス』を取り出し、ティアの腕でトリガーを引いた。

「無駄ではないぞ。ちゃんと覚えたしな」

軽く腕をふって、ティアは答える。

「さて・・・そろそろ・・・来るんじゃないかな・・・?」

「・・・感じるか?」

「いいや。トレーナーの勘、つてところかな。これだけ大量の手下を倒されたんだ、ただで放っておくわけがない。・・・言うておくけど、今の君とこの森の主じゃ、確実に体力・防御力で見劣りしてる。その点を考えると、攻撃はかわすのが基本になる。で、体当たりで木にぶつけさせたり、コンマ何秒の紙一重でかわして後頭部を叩くとかしてさっさと体力を削らないと、負けちゃう」

「わかつている。『火の粉』と『引つ掻く』が同時にできればいい

んだが・・・」

「『ダブルスキル』？ 少なくとも50は超えないと・・・」

と、言葉を切り、ミナトは横に避けた。

黄色い雷光が、草を焼き払う。

「お前・・・？ 私の縄張りを荒らしたのは・・・。こんな、貧弱
そんな人間とヒトカゲごときに・・・」

「この森の主、だね？」

「いかにも。私はこの森の女王・・・『ネール』。・・・『闇の電
鼠』とは私のこと」

木の上から降りてきたのは、一人のピカチュウ。ただ、相当場数を
踏んでいるのか、かなりの気迫を感じる。

「・・・誰だっけ？」

ミナトは気にしない。この程度の気配なら、四天王の手持ちにゴロ
ゴロしているからだ。

「カントーの『野生萌えものの拠点』の支配者・・・『闇の電鼠』

『蓬菜の妖姫』『岩山の魔龍』『無頼の雷帝』『地底の掘削王』

『魔窟の氷公』『焰神』^{ほむらのかみ}の六人の内、一人は聞いた事、あるだろう？」

「・・・『無頼の雷帝』サンダー、『魔窟の氷公』フリーザー、『
焰神』ファイヤー。その三人だけなら、聞いたことあるけど・・・」

「ジムと同じようなものだ。私を負かせれば、この『森の証』を渡
そう。出てくる野性萌えもののレベルレートが少々上がるという代
物だ」

と言って取り出したのは、バッジのような何か。緑色の光を放って
いる。

「まあ、私を捕まえようとしてもいいぞ？ それでも、これはやる」
「別に、もうピカチュウは家にいるしね」

『麻痺治し』のトリガーロックを外し、臨戦態勢に入る。

「そうか。お前ほどの器の人間だ、私もついて行きたいところだが・
・・それでは、散って行った他の者に示しがつかん。・・・行くぞ
！！」

ひゅ　　。

『引つ掻く』を、ミナトは紙一重でかわす。

暗闇の中、視界は非常に悪いが、ピカチュウの頬の持つ電気袋・・・そこに蓄積された電気の光が、ネールの居場所を教える。

「ティア、見えるよね」

「ああ」

「じゃあ、戦おう」

「応」

ネールの背後、一瞬紅く光ったかと思えば、ティアは『火の粉』を放つ。

見事命中、吹き飛んだネールは、倒れることなく立つ。

「っ、この視界の悪さを逆手にとったか・・・だが！」

そのまま飛びかかり、鋭い爪をティアに向かって振りかざした。

振り下ろされた腕は、確かにティアが咄嗟に身を庇って構えた腕を切り裂く。

「く・・・思ったより深くない。大丈夫みたいだ」

「服が・・・」

「気にするな、換えは持っている」

ティアは一步退く。

「しかし・・・予想より少ないとは言え痛いのは事実。多少攻撃を落とす必要があるか・・・」

「くく、そうかしらね・・・？」

「ふん・・・挑発の仕方、間違えていないか？・・・」

「！！」

ティアは、『鳴き声』で応戦、ダメージを軽減する。

「ふふ、ふ・・・そろそろかしら・・・っはは！」

「ん？ どうした・・・っく！」

倒れた・・・わけではないが、腕をおさえて、^{かが}屈みこんだティア。急に、息も荒くなった。

「はあ・・・く、くそ・・・っ、何、だ・・・体が・・・うごか、

な・・・」

「でしよう?! つははア! 私たちピカチュウの特性『静電気』を、ともに攻撃されてなかったから知らなかったんでしよう?!
くく、ははははっ!」

嗜虐的な快感を貪り、抱腹して笑っているネール。

「・・・ティア!」

ミナトが走りティアに近付こうとする。

「だぁ め」

目の前に突然、ネールが現れてミナトを引っ掻こうとする。

「その子は、ちゃ

んと料理してあげるから。近付いち

やア・・・駄目だよ!」

「邪魔だツ!!」

しかしミナト、無視。頬を裏拳で殴り、吹き飛ばす。

身長はティアとそう変わらず、跳躍でミナトの目の前に立ち塞がっていたネールは、ゴロゴロと地を転がった。

「ぐ、はぁ・・・っ、コイツ・・・!」

「・・・動くな・・・」

ネールを見たその眼は、確かに『動けば迷わず、この手で突き殺す』と言っていた。

「!!--」

急激な吐き気を催す殺気をぶつけられ、動くことが叶わなかったネール。

く、と呻きを漏らして構えたまま静止。

「ティア、大丈夫・・・?」

「なわけないだろ・・・ボケが・・・さっさとやれ」

『麻痺治し』と『傷薬』、二つの薬を順に投与。

傷はみるみるうちに塞がり、身体も自由に動くようになった。

「よし・・・っと。さて、行くか!」

「まって。『麻痺免疫』がそんなに強くないから、なるべくかわすのがベストだって事を忘れないで」

「わかつてる」

ひらひらと舞う袖が邪魔と思ったのか、ティアは引き裂いた。そして、前へと跳躍。

硬化した爪を持つその手で手刀を作り、思い切り突く。

ネールはそれをかわし、『体当たり』。

しかしそれを、ティアは爪を立てて手で受ける。

「つたいなあ・・・なにすんの！」

「知らん！ 私は、最善策をとったまで！」

勢いを殺しきれず、後ろへ跳ぶ。

「っこの！」

追撃へと転じたネール。

前進、そしてオーバーヘッドキック。

それをなんとかくると回転してかわし、足を掴んで投げる。

木にぶつかり、草叢の陰に隠れた。

「っはああ！」

高く飛び、『火の粉』を放つ。

草叢を焼き、ネールの居場所を頭あたまにした。

地面に降りた時は既にネールは下にいる。

予想したティアは、腕に「火の粉」を纏わせて構えた。

「はああああ！」

と、まあ、意気込んだのはいいが、ネールがそこに突っ込むわけではない。

『電光石火』でちょうど落ちる直前に突進。

ティアが腕で庇い、吹き飛ばす。

腕の炎はまだ健在。

木が背後に迫る。

それを足で蹴り、正面へ跳躍。

再び『電光石火』でネールがティアに突っ込む。

ティアは腕を構え、紅蓮の炎を手に纏わせ、備える。

ネールはそのスピードで一気に押すつもりだ。

「その程度、か？ お前の、実力」

「どういうこと？」

「わかるさ、すぐに」

くるり、と空中で回転、ネールの『電光石火』を避ける。

そして手がネールに近づく絶妙のタイミングで両手の『火の粉』を放ち、脇腹に二、三発命中させた。

「がっ……！」

「な？ わかっただろ？」

倒れて転がるネール。

対し、華麗に立つティア。

振り向き、跳躍し、追撃。

『引つ掻く』の体制で、ネールの胸部を裂いた。

「ぐ、はぁ……っ!!」

そして、渾身の『火の粉』。

鳩尾に火球をぶつける。

「っ、く………う」

ネールが、傷口を守るようにして仰向けに倒れた。

「勝っ……た……？」

「くっ……確かに、貴女の……勝ちよ。ほら、私の胸についてる『森の証』……持って行きなさい」

「………ネール、と言ったね。ちょっと待ってて」

ミナトが、ホルダーから桃色の『カートリッジ』を取り出し、ネールの腕にあてる。

「な、何……？」

「動かないで。変なところに入ると、痛いなんてものじゃないから」
「………」

「一応、火傷してる可能性もあるから。『回復薬』かいふくのくすりを処方しとく」

トリガーを引き、再びホルダーに戻した。

「何故、敵である私に……そんな事を？」

腕に違和感があるのか、薬をあてたところを揉んでいる。

「昨日の敵は今日の友……って言葉、知らない？　僕は、ただ単に怪我してる子を助けただけ」

「……そう、か……。ありがとっ、礼を言っよ」

「そんな、感謝されるほどの、ことなんて……」

そしておもむろに、ティアが近付いてきた。

「大丈夫だ。お前は、十分感謝に値する事をしている」

「っ、と。ティア、君にも『傷薬』を……」

と言って、ミナトは『傷薬』をティアにあてる。

「君は僕の大事なパートナーだからね……。っ、あ！
(気付いた、か。やっと……。つくづく鈍感な奴……)」

ティアが、ミナトの手をとり、握る。

「『対等な立場で話す』の意味、わかったか？」

「……。ん。わかった気がする……。というか、思い出した……。
……フレリアが死んでから、こんな感情は持ってなかったな……。
萌えもんを、『僕らと同じ』っていう概念を持って接するなんて」
そして、ミナトは、その手を握り返した。

「やっぱり、前のパートナーの傷は、深いみたいだな……」

「癒える事のない業……。っを感じだから……。っで、こんな辛気臭い話はおいとして、行こう。早くシスティナ拾っニビジムて、『鈍鉛市』
に行かないと」

「初の対人戦、だな！　よし。待ってろ、ニビジム……！」

ティアが、空を指差し、なにやら叫んでいる。

そしてミナトが、さくさく進んでいるのを見て、

「ああっ、待て、ミナト！　置いてくな、さもないと置いてくぞ！」
走って追いかけた。

B
e
N
e
x
t
S
t
o
r
y
.
.
.

<
<
T
O

F o r t h S t o r y : 『 陰の森・後篇 』（後書き）

次は、レベル10でタケシとかやってみます。

レベル差・・・？ ふん、戦略で何とかなる！！

いや、何とかする！！

と言うわけで、次もお付き合いいただけると嬉しいです。

F i f t h S t o r y : 『大地を知る者・前編』 (前書き)

すいません、更新が遅れました。

今回は、タケシと戦います。負けます。

あ、後、スルーしてオツキミやまに行きます。

それでは、ゆっくりしていつてね！！

Fifth Story：『大地を知る者・前編』

Place：鈍鉛市
ニビシティ

「さて・・・久しぶりのジムだなあ・・・」

「対人戦の腕は落ちてませんか、マスター？」

「なっ、何だと?! だとしたら、私はどうすれば・・・」

「心配無用。絶対、二人で勝ってみせよう」

「・・・応」

ニビシティ。家の瓦が普通より少し白く、灰色であることが密かに噂される街。

トキワの森から（方位磁針を使って）抜け、萌えもんせんたあで一日休息をとったミナトとティアとシスティナは、ティアに対人戦の心得を授けるために、この街のジムリーダー『タケシ』（本名は萌えもんリーグの処置により個人情報漏洩を避ける為に伏せられている）と戦いに来たのであった。

「さて・・・このレベルで勝てるかは謎だけど・・・」

「ふん、知るか！ 私は、常に全力で戦うだけだっ！」

「・・・まあ、なんていうか、ティア、やけにテンション高いねえ・・・?」

「当然！ なんとと言っても、初の対人戦だからな！」

「マスター、いざとなればこの私が戦わせていただきます」

「・・・ううん、いい。そんなのじゃ、ティアが成長しないでしょ」

「そう、ですね・・・マスター」

「ん？」

「奥様の件から、ずいぶん立ち直られたのではないですか？ 以前なら、勝つことだけが目的の勝負しか、なさらなかったのに」

「・・・そうかな？ 実感、ないよ」

ニビジムの自動ドアが開き、中へと歩む。

「やあ。ミナト、オーキド博士から話は聞いているよ。真剣勝負の邪魔にならないように、ジムトレーナーは休ませておいた」

黒めの肌。オレンジのシャツに、緑のベスト・・・格好は、体躯の細い山男と言ったところ。

彼こそ、このニビジムのジムリーダー『タケシ』。岩タイプの萌えもんを好んで扱う、人呼んで『大地を知る者』。

「それに、今回は比較的弱めの萌えもんを用意しておいたよ。それでも、君の萌えもんが太刀打ち出来るか謎だけどね」

「・・・ミナト。今回の作戦は？」

「始まってから考える」

「コイツ、手持ちに五人いるぞ。それに、全員私の倍程度のレベル持ちだ」

「って言うところ・・・20と25と考えるのが妥当・・・よし、タケシ、やってやるうじゃん！」

「望むところ！・・・とその前にジムジャッジを呼ばないと。マツオカさん」

ジムジャッジ・・・そのジム専属の、萌えもん勝負の審判。

戦闘不能、麻痺、毒、クリティカル判定など・・・一切の判断は彼にかかっている。

タケシが、軽くその『マツオカ』というジャッジを呼ぶと、

「やっと、仕事か　　！」

「五月蠅いな、こいつ」

「仕方ない仕方ない。ジムジャッジは、声もそれなりでないと駄目だし」

「よし、早速行くぞ！　ニビシティ萌えもんトレーニングジム、勝ち抜き方式萌えもんバトル！　アウェイサイド、ミナト！　所持萌えもん数、2！」

「あ、システイナは戦闘に出さないから、1で」

「了解！　訂正、ミナト所持萌えもん数、1！　ホームサイド、ニ

ビジムリーダー、タケシ！所持萌えもん数、5！」

「ティアの言った事、当たったね」

「両者、萌えもんリリース！」

「ティア、サポートは任せて」

「応、任せた！」

ティアが前へ出る。

対するタケシは、ベルトのホルダーからもんすたあぼーるを一つ取り出し、

「手加減なしだ、行け、オムスター！」

青い服、薄く金に輝く髪、その背中には身体ほどあろうかという巻貝。

「この日のために、オムナイトから無理矢理進化した・・・！ご主人の期待を裏切らぬため、ここで一度、朽ちてもらおう！」

「私も、ミナトの期待を裏切るわけにはいかない。お前には悪いが、勝たせてもらう！」

「・・・アーユーレディ？」

「セット！」

オムナイトがまず準備完了を継げ、

「レディ！」

ティアがそれに続いた。

「決闘・・・開始！」

「らあっ！」

「先手必勝！」

ほぼ同時に飛びだし、まず始めに放った技は。

「ティア、『引っ掻く！』」

「オムスター、『噛み付く！』」

非常に物理的相性、悪し。

ティアは爪を立て、腕を振るう。

それにオムスターは、思い切り噛み付く。

「ついたたあ！」

「がしがし」

「噛むな噛むな!!」

無理矢理振りほどいた。

爪を立てておいたのが幸いか、それほど傷は与えられなかったようだ。

出血もまだ安全範囲内。

しかしそれは相手も同じこと。

多少口の中を切ってはいるものの、目立った傷はない。

「く・・・『火の粉』も無理として・・・」

「追加攻撃、オムスター、『トゲキャノン!』」

オムスターの腕の鎧殻がいかくについている棘が、飛びだした。

・・・それも、連続で。

「つく・・・!!」

腕で庇うが、ティアの服には装甲の一つも為されていない。
刺さる棘が、ティアに激痛を送る。

「ティア！」

「ご主人、PPが一回分切れたみたいです」

「怯んでいる間に、追加攻撃だ！」

「ちっ、ティア、火の粉！」

腕からの火炎で、オムスターにぶつけた。

ついでに、棘も掃う。

鎧殻で護られているオムスターにはほとんど効いていないようだ。

「私の鎧は、水ノ岩タイプ。炎が効くわけないでしょう?」

「くそ、このつ・・・」

「ちよつと、ティア！」

「何だっ?!」

「こっち来て！」

一歩引き、ミナトの傍に寄る。

ミナトが、『傷薬』をあてる。

そして、耳元で

「肌の出ているところを狙って『引っ掻く』、それまではできる限り『鳴き声』で対応」

「了解」

「なるべく背後に回って、攻撃は回避が基本」

「わかった」

「作戦は以上！」

「っしやあ！！」

跳躍、オムスターの真正面に突っ込む。

「っ、何のつもり?!」

腕を振り、棘をぶつける。

それをしゃがんで回避、背後に回転して入り込む。

「な?!」

足払いでバランスを崩して、右手の手刀で首元を弾き、左手でオムスターの腕の甲殻をはがした。

「つい、たあ　　!!」

首元を殴られて意識が混濁している間に、背中 of 殻の及んでいないところを引っ掻く。

そして蹴り、壁にあてる。

「このまま一気に攻める!!」

「チッ・・・そうはいくか、オムスター! 『波乗り』!」

「はっ・・・く・・・」

立ち上がり、地面を蹴る。

空へと跳躍し、今度は壁を蹴る。

「な、何をするつもり」

「ティア、跳んで!!」

「!・・・わ、わかった!」

ミナトの指示に従い、空中へと飛ぶ。

オムスターが地面に立ち、床にひびが入る。

「はああああ!!」

だんっ、と再び跳ぶが、今度は後に水が湧いている。

「そ、そんな馬鹿な！」

「オムスターを踏んで、降りて！」

降下を始めていたティアは、無理矢理身体をひねってオムスターの頭を蹴って逃げた。

ついでに背後からサマーソルトキックを喰らわせて、地面に降り立った。

オムスターは踏まれた衝撃と蹴りの効果で、受身もとれず地面に落ちる。

「オムスター！」

「・・・・・・・・・・」

倒れたままのオムスターを見て、マツオ力が

「オムスター、ダウン！ タケシ、次の萌えもんは？！」

「くそ・・・・・・・・」

ボールから赤い閃光が奔り、オムスターを包み、消した。

ボールからの出し入れはほとんどこの形式で行われているらしいが、ボールを使わず、数多の萌えもんを忠誠で手にしてきたミナトは、それをよく知らない。

「行け、カブト！」

次に出してきた萌えもんは、三角座りの土色の萌えもん。

「あ、っ・・・・・・・・」

「行け、カブト！ ぶっ飛ばしてやれっ！」

「・・・・・・・・・・」

返事がない。ただの屍・・・・ではない。生きている。

「それにしても黙りこくってるね」

「・・・・はああ！」

ティア、爪で切りかかる。

「くつくつく・・・・吹雪！」

「・・・・・・・・・・」

カブトの身体から、なにやら冷たい風が巻き起こる。

「くっ・・・?!」

吹き飛ばされ、間合いが開く。

氷の粒すら錯覚しそうなその冷氣に、ティアの体力はことごとく奪われた。

「・・・っ」

風がやみ、ティアの意識は朦朧としている。

「くそ・・・っ、この程度で!!」

突っ込んで火の粉。

「勝った!!」

「え・・・?」

「ハイドロポンプ!!」

「・・・(ちゃん)」

指が地面に触れ、その横から、勢いよく水が噴き出す。

「っんな!」

まともに受けて、ティアが立っていられるはずがない。

ティアは倒れ、水の勢いに目を回して気絶した。

「・・・ティア」

ゲームセット

「決着! ホームサイド、タケシ勝利!」

「マスター、行きましょうか? 私が出れば・・・」

「え、いいや・・・賞金として所持金半分は・・・ポケットマネーをあまり持ちあるかないから、十円しかない」

「ああああ!! 何だそれ! でかい屋敷を持つてるからてっきり金を持つてるかと思ったのに・・・」

「十円くらい、君にあげる」

ぴん、とコイントスでタケシに十円玉を差し出し、ティアを抱えて去って行った。

「落ち込んでませんか? マスター」

「え? どうして?」

「今まで、ほとんど負けたことなんてなかったでしょう?」

「僕はそんなにやわじゃないって。タケシに負けたくらいで落ち込んだりしないよ」

「……無理は、しないでくださいね」

「……わかってる。ちよつと悔しいくらいだから」

しばらく気絶したままのティア。

萌えもんせんたあで体力を回復、中で休んでいた。もちろん、システイナとミナトがついて診ている。

「ずっと……気を失ったままだね」

「大丈夫ですよ。奥様のようなことは、きっとありませんから」

「まあ、それはわかってるけどさ……」

と、そんな感じの雑談をかわしている矢先。

『ナビゲータ』に、連絡が入った。

「えつと……あー、オーキドだ……」

「でないんですか？」

「やっぱしでなくちゃいけないよね……？」

ぼやきつつ、ミナトは応対した。

「何の用？」

『おお、ミナト。少々話したいことがあってな』

「長い話だったら、切るよ」

『ティアのことだったら？』

「……聞かせてもらおうか」

『そうこなくては……。そもそもティアは、わしがホウエンで拾ってきたのだ。赤い服の悪そうな奴に追われていたところを、な』

「ホウエン……？ ヒトカゲは、たしか……」

『うむ、カントーの、ごく一部でのみ生息しているはずだろう？』

疑問に思ったわしは、家を尋ねたのだ。そして得た答えが、『親が青い服の連中に殺され、捕獲しようと赤い連中も現れて、おまけに珍しがってトレーナーも寄ってくる。追従を逃れていたところできしと出会った』という……。まあ、ありきたりと言えばありきたり

な過去だったのだ』

「親のリザードンもどうしてホウエンなんかに移住したのかな……？」

『わしもそう思ったのだが、原因は不明のままだった。……あと、ティアの名前のことだが……』

「ティア・アトカーシャ。あれは、確実に『ロストシティ』の王家『アトカーシャ家』の黄金時代の王女『ティリア・アトカーシャ』をもじってるよね」

『わしもそう思う。実は、わしは一度、ティアを『ロストシティ』に連れていったことがあつてな。そのときに、自分で自分を命名したのだ』

「え……そうだったのか……知らなかった」

『それもまあ当然だろうな。あいつ、自分の過去は中々話さんからな。……そろそろわしは時間だ。それでは、またな』

「うん」

『ナビゲータ』の通信を切断し、ティアを覗く。

「聞いてた？ システイナ」

「はい。まさか、ティアにあんな過去があるなんて知りませんでした」

「まあ……あの言動から、何となく想像はついたけど、まさかあの名前は自分でつけたなんてね……」

「ティリアは、非常に気高く誇り高く、強く正しい心の持ち主だったと聞きます。……ティアは、きっとそうなりたかったのではないでしょうか」

「正しい心……ねえ。『自分の正義を信じることが出来る心』っていうのが、僕は『正しい心』だと思うんだよね……ティア、そうなれてるのかな？」

ティアの頬に、ミナトが触れる。

「んう……」と呟き、ティアの手がミナトの手に触れた。

その手は温かく、ミナトに『何か』を気付かせた。

「……勝つことは、重要じゃない……か。僕が吐く台詞じゃないよね……」

「でも、少し前までのマスターに、奥様はきつとそう仰ると思います。『勝つことより、戦って何かを得られたかが、重要なんだ』と……」

「そう……かな。フレイアがいなくなってから何か欠けたみたいなの……うん。確かに、僕の中で『フレイア』って存在がかけた。……あの榊サカキとか言う愚か者の所為で……僕は、いろんなものを失った。フレイアを、メアリーを、デイズを……」

「レディ・ボトムとヴァンも忘れないであげてくださいね」

「うん。だから……あの時から、僕は『勝つこと』で……何かを埋めようとしてたんだ……」

「今は、違いますよね。……でも、どうして？」

「わかんない。この子が来てから、いろいろ変わってきた。……感謝、しなくちゃね」

「はい。私も、今のマスター、前より好きです」

「……さり気に告白しても、駄目なものは駄目だからね」

「……やっぱりですか。奥様が後を引いてるんですよね……」
「当然でしょ」

ティアが昼過ぎに目を覚まし、昼食を求めてきた。

「腹が減った！ コッペパンを要求する！」

「どこで覚えたの？ そんなマイナーなネタ」

「ネタではない！ 私は、苺ジャムとマーガリンをぬったコッペパンが好きなんだ！」

「……仕方ない。ちょっと買つて来る」

「今、ポケットマネーがないんじゃない？」

「あー……ちょっと待って。窓口は………二ビにはないなあ」

「その辺のトレーナーから賞金を稼いで来ては？」

「だめ。この辺、もうまともにバトルしてくれる人いなくなっただし」その通り、今このニビシティでは2番道路の開通により野生化した森を恐れ、虫取り少年が激減し、塾生徒が激増している。

そして、塾帰りの時間は夕々夜にかけてなので、当然その時間にまともに萌えもんバトルを受ける者もなく・・・という、2番道路開通が生み出した複害の影響により、ニビ近辺の萌えもんバトル発生数が急激に減少しているのだ。

今、『元』虫取り少年達は萌えもん塾の時間なので萌えもんバトルは当然なし。

「そうでしたね・・・どうでしょうか？」

「確か・・・御月見山に僕の別荘があっただけ。そこなら、確か屋敷への転送機があっただけ」

六年前（『赤』時代）にワープする床がロケット団の手により完成、シルフカンパニーに実装された。

そのテクノロジーは未だに健在で、シルフ程度の建物は自由に行き来可能。

さらに長距離間の転送機にそのシステムが導入され、より安定・確実な転送が実現された。

ミナトの家・・・世界屈指の屋敷もそれを使用、各別荘（大きさは普通の家程度）間の転移に使われた。

「え・・・でも、出現率が上がってるんじゃない？ その・・・『森の証』とかいうバッジの所為で」

「確かに・・・それに、ネールの言ってた『蓬萊の妖姫』っていう萌えもんもちっと怖いし・・・」

「だが、行かないと所持金がひどいんだろ？」

「ん・・・そうだけど」

「コッペパンが買えないだろう。早く行くぞ」

ティアがミナトのジーンズを引っ張り、催促する。

「如何致しましょうか？」

「むむ・・・そうだねえ。どっちみち僕も携帯食糧だけじゃ

やってけないし、口座から引き落とすか」

「家にありましたよね」

「……だから帰るんだけど」

「あ、そ、そうでしたね。はは……」

ティアを抱え、システィナを従えて、ミナトは萌えもんせんたあを後にした。

勝つ術を見出す鍵は……そう、御月見岳にある。

o B e N e x t S t o r y :

<<T

F i f t h S t o r y : 『大地を知る者・前編』(後書き)

ここまで読んでくれた人、ありがとうございます。

次の更新は・・・いつになるでしょうね？

わかりませんが、続きにお付き合いいただけるとうれしそうですね・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953e/>

萌えっ娘もんすたぁ～ある最強のトレーナーの場合～

2010年10月21日01時27分発行